

一

次の1～5の――部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 論文集をアむ
- 2 葉がキく
- 3 誤りをホセイする
- 4 屋台でおでんを食べる
- 5 勇気を奮って発言する

二

次の問いに答えなさい。

問一 次の――部にあてはまる漢字をア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

大義メイ分を得る。

ア. 明 イ. 命 ウ. 盟 エ. 名

問二 次の熟語と、上下の字の構成が同じ種類である熟語として適切なものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

1 静物

ア. 青菜 イ. 弱者 ウ. 美声 エ. 豊年

2 着陸

ア. 退場 イ. 登山 ウ. 開会 エ. 預金

問三

① にあてはまることばを次のア～オから一つずつ選び、――部の慣用句を完成させなさい。②また、それぞれの慣用句の意味をカ～コから一つずつ選び、記号で答えなさい。

1 ふいを 発言に、会場はざわめいた。

2 一進一退の攻防に、かたずを 。

ア. のむ イ. くくる ウ. 射る エ. つく オ. 見る

カ. たいしたことはないと見くびる。

キ. 一心になりゆきを見守る。

ク. どうしようもなく困り果てる。

ケ. 驚いたり感心したりする。

コ. 予期しないときに何かをしかける。

三

は次のページから始まります。

次の文章は、ア、エの部分の順序が入れかわっています。正しい順序になるように並びかえ、記号で答えなさい。

万葉集の有名な歌に、

―そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国 と 語り継ぎ 言ひ継がひけり

というのがあります。日本という国が、「言霊の 幸はふ国」つまり、ことばが豊かに栄える国なのだということをつたった歌です。日本人は、万葉集の昔のころは、自分たちの使うことばの豊かさを意識していたと考えることができるかもしれません。

ア. そうした「目のことば」優先による弊害には、ほとんどの親が、気がついていません。子どもたちは、幼いころから「目のことば」ばかり重視されるので、「耳のことば」が自然におざなりになります。刷り込みが行われなくてはならない幼児期に、きちんとした刷り込みを行わずに、そのまま過ぎてしまっているのです。

イ. まず文字を教え、文字を読むことを教えようとしています。幼稚園なども、競って文字の教育をしています。そうして、子どもが早く文字を読めるようになると、それを喜ぶのです。声よりも文字のほうが高級だと思ひ込んでいるかのようです。

ウ. しかしながら、日本語が豊かだったのは、口で語ることばではなく、おもに目で見ることばだったように思われます。なぜなら、日本では、話すことばよりも、文章や記録のほうが、権威をもっていたからです。契約などをするときには、「口約束は当てにならない。証文をいれてほしい」などと言ったりします。つまり、「目のことば」が、「耳のことば」に優先するのです。

大人が子どもにことばの教育をするときにも、同じことが起こります。

エ. こうした「耳のことば」の軽視は、日本人の特徴といえるでしょう。現代に限らず、昔から、日本人は、耳よりも目のことばを上位においてきたために、欧米人などくらべると、聴覚的理解力が劣っているのかもしれない。つまり、耳がよくないのです。話を「聴く」ことが下手なのです。つまらないことならともかく、こみ入った、むずかしいことが、なかなか聴けない。もちろん、これは、耳の訓練を受けていないから、そうなるので、幼いときに、しっかり聴くしつけをしておけば、こんなことにはならないでしょう。

耳のことばが大切なのは、それが、子どもの知的発達にも、大きく影響しているからです。耳でことばを聴き分けることで、頭は良くなるのです。

(外山滋比古『日本語の絶対語感』)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本は恥の文化の国だと言われるが、「恥ずかしい」とか「みっともない」というのは、僕たちにとってとても馴染みのある感覚だ。

作家の司馬遼太郎は、日本文化研究者ドナルド・キーンとの対談で、日本社会に秩序があり、犯罪が少ないのは、「恥ずかしいことはするな」という意識があるからだと言及する（司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』中公新書、一九七二年）。

A、戦場で敵に後ろを見せるのは恥ずかしいことで、カッコ悪いから逃げない。鎌倉時代の武士にも、すでにカッコ悪いという感覚があった。それは、モラルでなく美意識だ。美意識だけで社会の秩序が保たれてきた国は日本だけなのではないかという。今でも犯罪が少ないが、それは犯罪がカッコ悪いからだ。親父の顔は潰れるし、自分も友だちに顔向けできないというだけで罪を犯さない。

① 恥ずかしいことはできないということだけで、社会の安寧秩序が保てる。その程度のことだけで安寧秩序が保てる社会というのは不思議だと司馬は言う。

「世間の目を気にする」とか「世間体を気にする」などと言うと、否定的に受け取られがちだが、「恥ずかしい」とか「みっともない」という思いは、法的に裁かれるかどうかに関係なく、自分を正しい行いに導く力になっている。

そんなことをするのはみっともない。罰せられるのが嫌だからしないというのではなく、みっともないからしない。法的には罰せられることがなくても、みっともないからしない。それは、法的に裁かれるからしないというよりも、むしろ自律的な自己規制力といえないだろうか。

日本の精神文化を世界に伝えたいという意図で、『武士道』を英文で出版した新渡戸稲造は、日本人にとってとくに重要

なのは名誉の感覚だという。

日本人にとっては、名誉を汚されることが最も大きな恥となる。恥を知る心は、少年の教育において中心的な位置を占める。「笑われるぞ」「恥ずかしいか」といった言葉が、正しい行いを促すときの最後の警告として使われる。このように新渡戸は、恥の意識によって名誉ある行動が導かれるとみなしている。

みっともない。恥ずかしい。それは、日本人ならだれでもしよっちゅう感じる、非常に身近な感覚のはずだ。そうした感覚によって自分の行動をコントロールする。これは、じつは他者中心の行動の律し方と言える。人の目に映る自分の姿を想像することで、「そんなのはみっともない」「そんなこともできないのは恥ずかしい」というように自分の行動を律していく。「自分がそうしたいからする」「自分がそうしたくないからしない」という自己中心的な行動の律し方をする文化と違って、人の目を意識する心をもつことで、法的裁きを厳しくしなくても社会の秩序が保たれてきたわけだ。人の目を気にするなんて②がないなどという日本文化への批判は、どうも的外れな気がする。

自分の姿が人の目にどんなふう映っているか。僕たちは、それをたえず意識して暮らしている。社会の秩序までもが人の目を意識した自己規制力によって保たれるほど、僕たち日本人は人の目に過敏な心理構造をもっているのだ。

（中略）

心理学者小川捷之は、日本人とアメリカ人の悩みについての比較調査を行っている。それによれば、「他人が気になる悩み」「自分に満足できない悩み」「大勢の人に圧倒される悩み」などで日米の差が見られ、日本人のほうがそうした悩みを抱く傾向があった。この中の「他人が気になる悩み」というのが、人からどう思われるかが気になる心理、つまり人の目が気になる心理に相当する。

この「他人が気になる悩み」は、「自分が人にどう見られているかよくよ考えてしまう」「他人が自分をどのように思っているかとても不安になってしまう」「自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう」「相手にイヤな感

じを与えているような気がして、相手の顔色を窺^{うかが}つてしまふ」「人と話していて、自分のせいで座が白けたように感ずるところがある」などといった項目で測定されている。このように感じる人が、アメリカ人と比べて日本人に多いというわけだ。視線恐怖^{きょうふ}とまではいなくても、人の視線が気になったり、自分が人にどんな印象を与えるかが気になったりする心理は、だれもが共感できるのではないだろうか。僕たち日本人は、視線恐怖の一步手前のところにいつもいるのかもしれない。

B、なぜ僕たち日本人は、それほどまでに人の目が気になってしょうがないのか。それには、前項で触^ふれた恥意識^{はにかみ}させるしつけが大いに関係しているわけだが、なぜそのようなしつけを行うのか、なぜ恥ということが重要になっているのかを考えていくと、関係性を生きる日本的自己^{じこ}の特徴^{とくちょう}に行き着く。

日本人は自己主張^{じこしゆちやう}が苦手だと言われる。グローバル化の時代だし、もつと自己主張ができるようにならないといけない。

では、アメリカ人は堂々と自己主張ができるのに、僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか。

それは、そもそも日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則^{はふそく}がまったく違っているからだ。

アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことだ。お互いにそういうつもりでコミュニケーションをするため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。お互いの意見がぶつかり合うのは

⑤ ため、まったく気にならない。

一方、日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は何だろう。相手を説得して自分の意見を通すことだろうか。そうではないだろう。僕たちは、自分の意見を通そうというより前に、相手はどうしたいんだろう、どんな考えなんだろうと、相手の意向を気にする。そして、できることなら相手の期待を裏切らないような方向に話をまとめたいと思う。意見が対立するようなことはできるだけ避けたい。そうでないと気まずい。

つまり、僕たち日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気^{かふいき}を醸^かし出すことなのだ。強烈な自己主張によって相手を説き伏^ふせることではない。

だから自己主張のスキルを磨^{みが}かずに育つことになる。自己主張が苦手なのは当然なのだ。その代わりに相手の気持ちを察する共感性を磨いて育つため、相手の意向や気持ちを汲み取ることができる。

相手の意向を汲み取って動くというのは、僕たち日本人の行動原理といってもいい。コミュニケーションの場面だけではない。たとえば、何かを頑張^{がんば}るとき、ひたすら

⑦ のためという思いがわりと大きい。

親を喜ばせるため、あるいは親を悲しませないために勉強を頑張る、ピアノを頑張る。先生の期待を裏切らないためにきちんと役割を果たす。そんなところが多分にある。大人だって、監督^{かんとく}のために何としても優勝したいなんて言ったりするし、優勝すると監督の期待に応えることができてホッとしていると言ったりする。

自分の中に息づいているだれかのために頑張るのだ。もちろん自分のためでもあるのだが、自分だけのためではない。

このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、「他人の意向を気にするなんて自主性が無い」とか「自分がない」などと批判されることがある。

D、それは欧米的な価値観に染まった見方に過ぎない。

(中略)

そもそも欧米人と日本人では自己のあり方が違う。僕たち日本人が、率直^{そつちよく}な自己主張をぶつけ合って議論するよりも、だれも傷つけないように気をつかい、気まずくならないように配慮^{はいりよ}するのも、欧米人のように個を生きているのではなくて、関係性を生きているからだ。

心理学者のマーカスと北山忍^{きたやましのぶ}は、アメリカ的な独立的自己観と日本的な相互協調的^{さうごきぎょうてき}自己観を対比させている。

独立的自己観では、個人の自己は他者や状況^{じやうきやう}といった社会的文脈から切り離^{はな}され、そうしたものの影響を受けない独自

な存在とみなされる。そのため個人の行動は本人自身の意向によって決まると考える。

それに対して、相互協同的自己観では、個人の自己は他者や状況といった社会的文脈と強く結びついており、そうしたものの影響を強く受けるとみなされる。そのため個人の行動は他者との関係性や周囲の状況に大いに左右されると考える。

このような相互協同的自己観をもつ僕たち日本人は、個としての自己を生活しているのではなく、関係性としての自己を生活している。関係性としての自己は、相手との関係にに応じてさまざまに姿を変える。その場その場の関係性にふさわしい自分になる。相手との関係性によって言葉づかいまで違ってくる。欧米人のように相手との関係性に影響を受けない一定不変の自己などというものはない。

(中略)

相手がどう思っているかが気になる。こんなことを言ったら相手はどう感じるだろうかと気になる。それも、僕たちが関係性としての自己を生活しているからだ。

僕たちの自己は、相手から独立したものではなく、相手との相互依存^{そうごいぞん}に基づくものであり、間柄^{あいだから}によって形を変える。僕たちの自己は、相手にとっての「あなた」の要素を取り込む必要がある。だから相手の意向が気になる。相手の視線が気になるのだ。

でも、関係性を生きるとなると、そんなふうにシンプルにはいかない。自分の意見を言う前に相手の意向をつかむ必要がある。気まづくならないようにすることが何よりも重要なので、遠慮のない自己主張は禁物だ。相手の意見や要求を汲み取り、それを自分の意見や要求に取り込みつつ、こちらの意向を主張しなければならない。

このように関係性としての自己を生きる僕たち日本人は、たえず人の目を意識することになる。

関係性を生きる僕たちの自己のあり方は、「人間」という言葉にもあらわれている。

哲学者の和辻哲郎^{わつじてつろう}は、「人間」という言葉の成り立ちについて疑問を提起している。「人」という言葉に「間」という言

葉をわざわざ付けた「人間」という言葉が、なぜまた「人」と同じ意味になるのかというのだ（和辻哲郎『人間の学としての倫理学^{りんりがく}』岩波書店、一九三四年）。

「人」だけでもいいのに、なぜわざわざ「人間」というのか。なぜ「間」を付けても意味が変わらないのか。ふだん当たり前のように使っている「人間」という言葉だが、改めてそう言われてみると、たしかに妙だ^{みょう}。

和辻によれば、辞書『言海^{げんかい}』に、その事情が記されている。もともと人間という言葉は「よのなか」「世間」を意味していたのだそう。それが「俗に誤って人の意になった」。つまり、「人間」というのは、もともとは「人の間」、言い換えれば「人間関係」を意味する言葉だったのに、誤って「人」の意味に使われるようになったのだという。

誤って使われたのだとしても、なぜまたそんな誤りが定着したのか。そこにこそ大きな意味があるのではないか。

和辻は、^⑩このような混同は他の言語ではみられないのではないかという。ドイツ語でもこんな混同はみられないし、中国語でも人間とはあくまでも世間を指し、人を指したりはしない。他の言語では「人」と「人間関係」がしっかりと区別されているのに、日本でのみ混同があるとすれば、そこには日本的な「人」のとらえ方の特徴があらわれているはずだ。

ここからわかるのは、日本文化には、「人＝人間関係」というような見方が根づいているということだ。

和辻は、そのところをつぎのように説明する。もし、「人」が人間関係とはまったく別ものとしてとらえられているのであれば、「人」と「人間関係」を明確に区別すべきだろう。それなのに、日本語では「人」と「人間関係」を区別せずに、「人間関係」や「よのなか」を意味する「人間」という言葉が「人」の意味で用いられるようになった。ここにこそ、日本的な「人」のあり方が示されている。

僕たち日本人にとって、「人間」は社会であるとともに個人なのだ。

このように、日本文化のもとで自己形成をした僕たちの自分というのは、個としてあるのではなく、人とのつながりの中にある。かかわる相手との間にある。

一定不変の自分というのではなく、相手との関係にふさわしい自分がその都度生成するのだ。相手あつての自分であり、相手との関係に応じて自分の形を変えなければならない。だからこそ人のことが気になる。人の目が気になって仕方がないのだ。

(榎本博明『へ自分らしさ』って何だろう？自分と向き合う心理学)

問一

本文には、次の形式段落がぬけています。この段落が入る直前の十字をぬき出さない。(、や。や「」は一字とする。)

個を生きているのなら、自分の心の中をじつくり振り返り、自分のしたいことをすばいいし、自分の言いたいことを言えがいい。相手が何を思い、何を感じているかは関係ない。自分が何を思い、何を感じているかが問題なのだ。自分の思うことを言う。自分が正しいと考えることを主張する。自分の要求をハッキリと伝える。それでいいわけで、じつにシンプルだ。

問二

A

、

D

にあてはまることばの組み合わせとして適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|----|---|------|---|-----|---|-----|---|----|
| ア. | A | たとえば | B | では | C | そして | D | また |
| イ. | A | たとえば | B | では | C | そして | D | でも |
| ウ. | A | たとえば | B | そして | C | では | D | でも |
| エ. | A | だから | B | そして | C | しかし | D | でも |
| オ. | A | だから | B | そして | C | しかし | D | また |

問三 ①「恥ずかしいことはできないということだけで、社会の安寧秩序が保てる」とあるが、日本の社会がこのようである理由を説明した文として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日本人にとって「笑われるぞ」や「恥ずかしくないか」という言葉は、名誉を保つうえでの警告の言葉になるから。
イ. 日本人は、「みっともない」や「はずかしい」という感覚によって自分の行動を律し、コントロールしていくから。
ウ. 名誉を汚されることを恥じる日本人にとって、法的に罰されることは、自己を規制するうえで最も大きな力となるから。
エ. 人の目を常に意識する日本人は、社会の秩序までが、人の目を過敏に意識した心理構造に基づいて成り立っているから。

問四 ② にあてはまることばとして適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 客観性 イ. 主体性 ウ. 合理性 エ. 社会性 オ. 統一性

問五 ③「自己主張」と反対の内容を示す表現を本文から十三字でぬき出しなさい。(、や。や「」は一字とする。)

問六 ④「日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則がまったく違っていている」とあるが、その違いを本文の内容をふまえて説明しなさい。

問七 ⑤ にあてはまることばとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日常茶飯事 イ. 言語道断 ウ. 喧嘩両成敗 エ. 以心伝心

問八 ⑥ にあてはまることばを二字で、⑦ にあてはまることばを三字で、それぞれ本文からぬき出しなさい。

問九 ⑧「関係性としての自己」⑨「一定不変の自己」とあるが、それぞれがどういうものかを簡潔に説明している部分を、⑧については十四字で、⑨については十字で本文からぬき出しなさい。

問十 ⑩「このような混同」とありますが、

(1) その内容を説明した文として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「人」という言葉は、本来、「人間関係」を表していたはずであるのに、誤って「人間」という意味で使われるようになったこと。
イ. 「人間関係」という言葉は、本来、「人」という言葉で表されていたはずであるのに、誤って「世間」という意味で使われるようになったこと。
ウ. 「人間」という言葉は、本来、「人間関係」を表していたはずであるのに、誤って「人」という意味で使われるようになったこと。
エ. 「よのなか」という言葉は、本来、「人」という言葉で表されていたはずであるのに、誤って「人間関係」という意味で使われるようになったこと。

(2) 「このような混同」が起きる理由を説明した文として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、日本人は「自己」を個として考えるのではなく、人とのつながりや関わる相手との間にあるものとして考えるから。
イ、日本語では、「人」と「人間関係」という言葉の意味を明確には区別せずに用いてきた経緯があるから。
ウ、日本において、自分というものは、相手との関係に応じて形を変えていく必要があるものとして考えられているから。
エ、日本語においては、「よのなか」と「世間」という言葉の意味が非常にあいまいなものであったから。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

青い麦の波が、音たてて揺れている。

新子はこの季節になると、麦の波をみながら ① していることが多い。

おとしより去年、去年より今年の方が、 ② している。自分が遠いところへ旅をしている気分になる。

旅はいつも一人だ。みんなが見送って手を振ってくれる。どうして旅に出るのか、どこに行くのかもよくわからない。それでも新子一人が、緑色に揺れる麦の海の中を歩いていく。

もし本当にそんなことをしたら、真先に光子が、うちも行く、と言って困らせるに決っているが、光子もまた、お行儀良く手を振っているのが、やっぱりおかしい。

① しているだけでなく、鼻がむずむずし、目が痒くなる。お陽さまのせいだろうか。もしかしたら頭の中に、かすみがかかってしまったのかもしれない。

「新子、なに溜息ついているの？」

② 長子に言われたりする。

「お腹がすいた。おやつない？」

「アラレならあるよ」

カキモチを細かく砕いて、油で揚げてお砂糖をまぶしたものが、ノリの入っていた四角い缶に入っている。アラレを三つか四つ食べてみるけれど、美味しくない。宿題もしたくないからまた、窓から麦畑を見ている。

③ きれいなんだろう。

緑色の細い葉が、片方からの風でいっせいにおじぎし、また反対からの風でおなじようにおじぎする。おじぎした部分

だけ銀色に光る。

麦がやわらかいのか、風がやさしいのか。

「あ」

「どうしたの、何見てるの？」

雑誌ざっしを読んでいた長子が、首だけを上げた。

「何かが落ちたの」

「落ちた？」

「うん、黒いものが空からまっすぐ」

「ヒバリでしょ」

「石みたいに落ちたのよ」

「ヒバリは自分の巣めがけて、石みたいに落ちるのよ。飛び立つときも、まっすぐ空に上がるの」

「行ってみてもいい？」

「どこに」

「ヒバリかどうかたしかめに。だって父さんは自分の目でたしかめなさいって言ったもん」

長子はちよつとのあいだ、黙だまっていたが、

「どこにヒバリの巣があるかわかるの？」

と言った。

「わかる。うちの松とあつちの電信柱にまっすぐ線を引いた真中まんなかぐらい」

「じゃ、たしかめてくる？ ヒバリの巣を見つけても近寄っちゃダメよ。たいていヘビがいるからね」

ヘビは嫌きらいだ。

シゲルを誘さそって行けば、ヘビ退治はシゲルの役目なのに。

「……ヘビはいつも、ヒバリの卵を狙ねらってるからね」

父さんは、何事も自分の目でたしかめなさいと言うけれど、大変なことなんだ。ヒバリの巣の探険は、別の日にしよう。

学校の帰りに、たまたまシゲルと一緒にふりして、ヒバリの巣を知ってる？ と聞いてみよう。知らん、と言う

に決まってるから、うちの前の麦畑の中にあるよ、と言えば、シゲルはすぐに探険に行くと言い出すはず。

ちゃんと計画していたのに、学校に行くとやっぱりぼんやりしてて忘れてしまった。

シシユンキなのかな。

シシユンキって、漢字では書けないけど、でも、春という字が入っていた。春の病気にかかってしまったのかな。

村上ひづる先生に聞いてみよう。

新子はお昼休みに保健室に行った。

学校の中で一番の美人なのに、ひづる先生はマスクをしていることが多い。ひづる先生がマスクをしていると、美人が

台無しでがっかりだ。

保健室のガラス戸を開けた。

ひづる先生は机に向かって何か書いていた。マスクはしていない。二つあるベッドも空いていた。

「先生」

「あら青木さん、どうしたの？ ^④ケガ？」

新子が行くとひづる先生はいつも、ケガ？ と聞く。他の子には、お腹でも痛いのか？ とか風邪かぜ引いたのか？ とか言うのに。

「ケガじゃなくって……シシユンキの病氣です」

ひづる先生は、目をつむったり開けたりして首をかしげた。小さなパールのイヤリングがピンクの口紅に似合っている。お姫さまみたいだと思う。

「シシユンキじゃないと思うけど……」

「でも、目とか鼻とかヘンなの。麦畑みてる、もぞもぞしてくるんです」

「こっちに来てごらんさい」

丸い回転椅子に腰かけると、ひづる先生のいい匂いがした。

新子は口を開けさせられ、目の上まぶたをひっくり返され、首のところが両方からぐりぐりと触られ、

「どっことも悪くないよ」

と言われた。

それからコップの水に苦いうがい薬を入れて、うがいさせられ、目薬をさされた。

「さあ、外に行つて遊んでもいいよ」

「病氣じゃないの？」

「⑤ はまだ早い。それにね、⑤ は病氣じゃないの」

そう言いながらひづる先生は新子のマイマイを、引っぱった。そのとき、ひづる先生の左手に指輪があるのに気がついた。

「あ、きれいな指輪。それ、宝石？」

先生の頬が唇と同じくらいピンク色になった。

「これ？ これはダイヤモンド」

「ほんと？ 見せて見せて」

新子はひづる先生の手を顔の前に持ってきて指輪を見た。小さくて透明な宝石がキラキラ光っていた。藤蔓のハンモックに寝そべって千年の川を見ているとき、川の水が細かい光になって散っていくのと、よく似ていると思った。

「……先生、来週の土曜日で学校をやめるのよ」

心臓が止まりそうだった。息まで止まってしまった。

「どうして？」

「結婚するの」

「いつ？」

「五月だけど、いろいろ準備があるから、学校に来るのは来週までなの。先生方は知ってるけど、みんなには月曜の朝礼のときに校長先生がお話することになってるの。青木さんは、指輪のこと気がついたから言ったけど……」

「誰と結婚するんですか？」

「大学のときの知り合い。東京に住んでるから東京に行くの。ラグビーの選手でね、こおんなに大きい体なの」と両手をお腹の前でぐるぐる回した。

新子は、何を言えいいのかわからない。ひづる先生が学校からいなくなるのだ。

「うちも、東京に行きたい」

「大きくなったら行けるわ。遊びにいらっしやい」

「どうして結婚するの？」

「どうしてかなあ、ずっと迷ってたけど、結婚しようって決めたの」

「迷ったときは、ちゃんと自分の目でたしかめた方がいいんだって。*クロレラもヒバリの巣も、自分で見るまでは信じちゃダメなの」

⑥ ひづる先生は、またもや目を閉じたり開けたり忙しく動かした。溜息を吐いたまま、新子をじっと見ている。

「……誰が青木さんに、そう言ったの？」

「父さん」

「ふうん。偉いお父さんね。でも、見ただけじゃわからないことも、たくさんあるの。エイヤツて決めなくちゃならないこともね」

その日、新子は、一人で麦畑の中に入ってしまった。いつも想像するだけで実行しなかったけれど、エイヤツと決めたのだ。麦の葉は新子の首の高さしかない。これからどんどん伸びて穂がとび出してくると、頭まで隠れてしまうけれど、歩いていると首だけが海に浮かんでいるみたいだ。

畝がまっすぐなのがわかつているから、足が勝手に動いていく。

前の方から風がくるので、波を掻き分けて泳いでいる気分。

ヒバリ、ヒバリ、ヒバリ。

ひづる、ひづる、ひづる。

かわりばんこに、二つの名前が浮かんでくる。

悲しいけれど、ひづる先生はエイヤツと決めたのだ。結婚して東京へ行ってしまったら、もうひづる先生は、別の人になってしまう。おでこに手を当てたり、マイマイを引っぱって笑ったりするひづる先生じゃなくて、大きな男の人のお嫁さんになるんだ。

そう思うと、ヘビなんか怖くない。この目でヒバリの巣を見つけるもん。そして本当にヒバリの巣なのか、たしかめるもん。石ころが空から落ちるように麦畑の中に入ってしまったのがヒバリだったら、ひづる先生もきっと大丈夫だ。何が大丈夫なのかわからないけど、ひづる先生は東京に行っても幸せになるような気がする。

ヒバリでなくて、空から落ちてきたのが石ころだったら、きつとうちがへんな夢を見てたのね。ほんやり麦畑を見ていたうちも、きつとへんなんだ。

新子は願かけみたいのに、ヒバリの巣とひづる先生のことを一緒に考えた。だからどうしてもヒバリの巣を見つけなくちゃならなかった。

ええと、うちの家の松と、あの電信柱の真中ぐらいたった……。

畝を二つとび越えた。

前の松を見てうしろの電信柱を見て、もう二つ畝を越える。

すると、松と電信柱が一直線になった。

空からまっすぐ落ちてきて、この畝のどこかに入りこんだんだ。

そうっとしゃがんでみた。水の中に潜り込んだように暗くなった。でも、波の下は静かで青いパイプが遠くまで続いている。

新子は這いながら進む。ヘビはいない。やつぱり自分の目で見なくっちゃ。

どんどん這って進んでいくけれど、何もない。手と膝が乾いた土でこすれて痛くなった。

立ち上がろうとしたとき、すぐ近くでピピッ、チチチッ、と小さな声がした。

新子の体は石のように固くなった。隣の畝から聞こえてくる。

麦をそうっと掻き分けて顔を出してみた。

すぐ目の前に干し草のかたまりがあった。その中に、千代紙で作ったような三角形のくちばしが三つ。踊ってるみたい

にユラユラ動いている。緑色の水の底の、花びらみたい。

新子は自分がヘビになったような気がして、慌てて麦から手を放した。ヘビでなくて人間だけど、こっそり持ってい

てしまいたいほど可愛い。

何て小さいの。

もう一度、そうつと麦を掻き分けてよく見ると、くちばしの下に目があった。新子を見て体を揺すっている。ヒバリだ。母さんが言つてたとおり、ヒバリの巣があった。

息をするのが怖い。胸がどきどきして、本当は、わあっと叫び出したい。六つの小さな黒い目は、新子のマイマイを見ている。新子のマイマイは鳥の羽根のように立っているから、きつと母親と間違えてるんだ。

そのとき、新子は不思議な気持ちになった。

自分がヒバリのヒナたちの母親になったような、とろとろと暖かい気分。このヒナたちがへびに襲われたら、へびが怖くても絶対に逃げ出さないで、へびを追い返してやる！

自分が急に強く大きくなったような、胸のあたりがふくらんでいく気分。

そしてまた、なぜだか説明できないけれど、ひづる先生はきつと、幸せになるだろうと思った。ひづる先生がいなくなるのはさみしいけれど、ひづる先生が幸せになるなら、それでいいんだ……。

悲しいけれど胸の中が熱くしんとなって……。

新子は、何もかもが初めての気分で、どうしていいかわからなくなった。

笑いたような泣きたいような。

でも新子は、笑うことも泣くこともしないで、そつとヒバリの巣から離れた。

麦畑の端まで来たとき、わつと声が出て涙が流れてきた。

畑に出ていた初江が新子に手を振った。

「どうしたの？ 新子、ケガしたの？」

ああまただ。

保健室に入っていくと、ひづる先生は新子に、ケガ？ と聞いた。

ケガをしたから保健室に行つたんじゃない。今だつて、泣いてるのはケガのせいじゃない。

心が、胸の中が、何ていうのか、何ていうのか、ものすごく不思議な感じで……やっぱり春の病気なのかな。

家に帰って新子は、長子に言った。

「やっぱりヒバリだったよ。ちゃんと自分の目でたしかめたよ。でも、自分の目でたしかめると、春の病気になっちゃうね。うちの目、病気になっちゃった」

新子は赤い目を、ごしごしとこすった。

(高樹のぶ子 『マイマイ新子』)

*マイマイ……額のつむじのこと。新子は、その部分の毛が立ち上がっている。

*クロレラ……緑色の藻の一種。池や水田に発生する。

*畝……畑の中で、土を筋状に高く盛り上げたもの。

問一 〓部「麦」とありますが、「麦」という字の入った熟語としてふさわしくないものを次のア～クから二つ選び、記号で答えなさい。

ア. 麦畑 イ. 麦跡 ウ. 麦水 エ. 麦茶 オ. 麦作 カ. 麦春 キ. 麦秋 ク. 麦飯

問二 ① にあてはまる四字のことばを、本文からぬき出しなさい。

問三 ② と ③ には同じことばがあてはまります。三字のひらがなのことばを考えて書きなさい。

問四 ④ 「ケガ？」とありますが、この部分から新子のどんな様子がわかりますか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. いつも元気に動き回っていて、病気よりケガの方が心配される様子。
イ. いつも保健室を訪れる甘えん坊で、先生からあまされてある様子。
ウ. いつも保健室を訪れていて、「ケガをしました」と報告している様子。
エ. いつもけんかばかりしていて、友だちとの争いでケガがたえない様子。

問五 ⑤ にあてはまることばを、本文のここより前を参考にして漢字三字で書きなさい。

問六 ⑥ 「ひづる先生は、またもや目を閉じたり開けたり忙しく動かした。」について、

(1) これと同じような内容の表現をこれより前から一文で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。(、や。や「は一字とする。)

(2) なぜひづる先生はこのような動作をしたのですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 新子にあきれてしまって、落ち着いた態度をとることができなかったから。
イ. 新子の活発な動きを見ていられなくなって、目をまたたかせてしまったから。
ウ. 新子に対していら立つ気持ちがいきてきて、それが表情に表れているから。
エ. 新子の言っている内容が突拍子もないことばかりで、理解に苦しんでいるから。

問七 ⑦ 「どうしてもヒバリの巣を見つけないかなかった」とありますが、それはどういう気持ちからですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ひづる先生はエイヤツと決めたのだから、自分も思い切ってヒバリの巣を見つけないと恥ずかしいという気持ち。
イ. 自分がヒバリの巣を見つけないことができないと、ひづる先生が東京で幸せになることはできないと焦る気持ち。
ウ. 自分がヒバリの巣を見つけないことができれば、ひづる先生はきっと東京で幸せになれると信じている気持ち。
エ. ひづる先生が東京に行ってしまう前に、なんとしてもヒバリの巣を見つけて見せてあげたいという必死な気持ち。

問八 「ヒバリ」について、

- (1) ヒバリはどこにいるのですか。「松」、「電信柱」の二つの言葉を使って二十字以内で答えなさい。
- (2) 巣にはヒバリは何羽いましたか。漢数字で答えなさい。

問九 ⑧「わっと声が出て涙が流れてきた」とありますが、それはなぜですか。新子の心情にふれて説明しなさい。

(国語問題終わり)

得点